

書籍電子化と図書館の未来

本特集に対して最先端にいる方々から生の発言を聞こうと、座談会を企画した。
図書館、情報学、仏教学、西洋学、東洋学など、論説に昇華する前の、
沸々とした思いや動きを感じ取っていただきたい。

入江 伸慶應義塾大学
メディアセンター × 永崎研宣人文情報学研究所
主席研究員 × 下野正俊愛知大学
豊橋図書館館長

司会 木島史雄愛知大学現代中
国学部准教授

木島 本特集の巻頭座談として、慶應義塾大学メディアセンターの入江伸さん、人文情報学研究所の永崎研宣先生、愛知大学からは豊橋図書館館長で、文学部哲学専攻の下野正俊先生にお越しいただき、学術情報と電子化デジタル化のかかわりについて、様々な視点からお話を伺っていこうと思います。まずは永崎先生に「人文情報学の現状と目指すもの」

を語っていただき、続いて分野ごとの特色を伺います。仏教学については永崎先生、西洋文献学については下野先生、東洋文献学については木島がつづきます。後半は図書館を主題に、入江さんに図書館界の電子データへの取り組みをお話しいただき、次に一般の大学図書館の立場から下野先生にご発言いただこうと思います。

I ……………人文学とデジタル

木島 最初に永崎先生に、ご所属機関の名前でもある「人文情報学」で何ができそうで、どういう動きをしているのかという点をお話していただきたく思います。
永崎 人文情報学にはいくつかのスタンスがありますが、「デジタル技術を活用することで人文学をよくする」というの

が基本です。学術情報、これには古典原典などの研究対象となるものと、学術論文などの二次文献の二つがありますが、それらを扱う媒体の変化にともなって研究方法も変わってきますし、情報共有のしくみも変わってくる。それからスピード感が全く変わってくる。さらに社会へ

の発信というところも非常に変わってくるはずですが、人文学がそれらにどう対応していくかというのが、人文情報学の、学問としての課題です。一方で、研究というのは、個人が自分の知的関心に従って行っていくものという面もあり、そういう観点では色々なデータを使うことによって面白い研究テーマが見出されていくわけです。つまり大きく、既存情報の共有にかかわる部分と、研究手法・テーマにかかわる部分の二つがあるように思います。これらが人文情報学という動きの中に混在しているわけです。

さらに、人文学に限定しない、広い意味での「情報学」の人たちが、こんな手法もあるぞと、示唆というか、提案をしてくれています。例えば Google ブックス¹⁾を Ngram Viewer²⁾で分析して見せるカルチャロミクス³⁾なんかですね。これらは、既存の人文学とは関係ないところから、デジタルツールを使うことでこんなことができるということを示しているわけです。ただし、発見のコンテキストにはそれまでの人文学的な蓄積との接続が必要ですので、これも基本的には従来の歴史研究の文脈の中に位置付けることで正当性を説明できるという面があります。もう一つ、図書館情報学も結構入ってきています。特にデジタル媒体において研究資料、研究成果をどうやって整理するかという点では、図書館情報学の貢献も非常に大きいわけです。

デジタル・ヒューマニティーズの 歴史と性格

「デジタル・ヒューマニティーズ」(digital humanities)⁴⁾という言葉は2004年、2005

年ぐらいから出てきたもので、それ以前はヒューマニティーズ・コンピューティング (humanities computing) と言われていました。最初はコンピュータ自体が体育館のような巨大な建物に真空管をいっぱいいつないでというような状況でしたが、その頃からトマス・アクィナスの電子索引⁵⁾を作ることを構想した人がいたらしいのです。もちろん出来上がるまでには相当に時間を要しましたが、一応デジタル・ヒューマニティーズの淵源というそれが挙げられます。日本だと1950年代の終わり頃に計量国語学会というのができました。最初は紙でやっていたのですが、しばらくして徐々にコンピュータも使われるようになっていく。1970年代に入るとヨーロッパとアメリカにそれぞれヒューマニティーズ・コンピューティングの学会ができ、2000年代に入ってデジタル・ヒューマニティーズ学会連合というのが作られて現在に至るわけです。日本でも1989年に情報処理学会の中に「人文科学とコンピュータ研究会」というのができて、これが我が国のデジタル・ヒューマニティーズの性格を決定付けることになりました。日本では、情報工学、あるいはコンピュータサイエンスの文脈で研究が行われることになったので、人文学への広がりが弱いという面があります。よく比較されるのはヨーロッパの学会です。ヨーロッパのほうはアソシエーション・フォー・リテラリー・アンド・リングイスティック・コンピューティング (ALLC: Association for Literary and Linguistic Computing)⁶⁾という形で始まりました。文学研究と言語学研究を、コンピュータを使って進めよ

うということですね。始まりの時点での位置付けの違いが、その後の方向性というか性格付けの違いにつながっていったように思われます。

今にして思えば、このような日本の研究の道筋は、わりと東アジア的でもあったのかなという気がします。中国、韓国もそうなのですが、人文学者はデジタルにあまり手を出さないのです。考えていただくと分かりやすいのですが、出版するときに我々は原稿を書いて出版社に投げたら、校正はやりますけれど、出版社が何とかしてくれて、言われた通りにしているといつの間にか本になって国会図書館に入ってずっと保管される。要するに我々研究者は原稿を書くだけでいいんです。基本的にそのアナロジーでデジタルを捉えているのかなと思います。日本で、あるいは東アジアでデジタル・ヒューマニティーズという場合も、どちらかという情報工学の人たちがやっていて、人文学の人たちは成果を使わせてもらうという傾向が強いのかなと思います。

ヨーロッパの場合はかなり違って、人文学者でも自分たちでデジタルツールを作るどころか、データの規格を作るところからやっています。つまり自分たちがどういうことをしたいかを明確にしておかないと、自分たちが希望するものはできないと考えるわけです。そこがすごく面白いなと思います。きちんと調べたわけではないので印象論なのですが、活版印刷技術とか DTP 印刷技術は、基本的にヨーロッパ、アメリカで作られたもので、アジアにいる我々は、常にすでに作られた枠組みを受容して、そ

れにのっかってやっているだけなんですよね。ヨーロッパでは、例えば聖書のテキストを作るとなると、作る段階でその仕組みとか、やり方を開発しているのです。しくみや、やり方を決めるところから専門家がかなり深く関与していたわけです。ところが我々は、その辺のことをすっ飛ばして、誰かが作った仕組みにのっかってやってきたわけです。ヨーロッパでは、それを作ってきた。デジタルでも同じようなことが起きているのかなと最近思っています。

TEI (Text Encoding Initiative)

テキスト・エンコーディング・イニシアティブ (TEI: Text Encoding Initiative) コンソーシアムという団体があります⁷⁾。これは人文学においてデジタルデータをどういう構造で作るべきかということを議論してガイドラインを作るための国際的な共同プロジェクトで、1987年に始まっています。日本ではほとんど知られていなくて、去年 (2018年) ようやくアジア初の総会を東京で開催することができました。30年経ってようやく総会をアジアにもってこれたというような状況です。TEI コンソーシアムの最初は文学と言語学が中心でしたが、博物館関係の資料なども扱えるようにし、特に最近、力を入れていたのは中世です。中世の写本などをきちんと扱えるようにすることに力を入れていて、そういった流れも最近ようやく日本に持ち込めるようになってきました。

その TEI コンソーシアムで、一昨年ようやく日本語の資料を扱う分科会を作ることができました。それまで TEI 協

会は、テキストというのは汎用的なものであるべきだから特定の言語文化に関する議論はそれほど力を入れるべきではないという雰囲気があり、日本語がどうこうと言ってもなかなか話が通じなかったのですが、ようやく日本語資料のための分科会を作るところまでできました。テキストの構造をどうするか、デジタルだと研究者が使いやすい構造に作り上げていくことが、本来はできるはずですが。ヨーロッパ・アメリカではそういう議論を30年やってきたんですが、それを日本でもやっていけるようにしようという流れがようやく出来てきました。国文学研究資料館の大型プロジェクトにも、このTEIに関する研究グループが一つありますし、他にもいくつか国内にそういうグループが出来てきています。

入江 TEIもやたら複雑なように見えますが、学术界ではうまく受け入れられていますか。

永崎 ガイドラインを見ると複雑ですけど、実際には自分が使うところだけを見ればいいので、それほど困ることはありません。最初にガイドラインを見てはいけないんです。ヨーロッパでもアメリカでもチュートリアルとかが頻繁に開かれています。特に驚愕したのは、フランスに中世研究者のTEI仲間がいるのですが、その人が助成金を取って、世界中から中世研究をしている大学院生を集めて、TEIを教えるための1週間の合宿に300万円ほどを投入していることです。今年はイタリアのストレーザというマッジョーレ湖畔の町で合宿をやり、日本からも数人参加しました。入門編をやったのですが、予習のためのMOOCも用意



…………… 永崎研宣[Nagasaki Kiyonori]

してあります。ヨーロッパで中世研究をする大学院生はこれを体験させてもらえるのかと思ってすごく圧倒されました。日本ではとてもそんなことはできないので、何か根本的に考え方が違うんだなと実感しました。人文学研究者の育成の仕方ですね、色々な意味で勉強になりました。これが近代・現代研究になると、また全然違う感じになるとは思いますが。

下野 アジア的な技術受容の話がされましたが、自動車などと同じで、東洋人にとっては突然出現したテクノロジーであって過去と切り離されているものですよ。古代以来の写本の構造というのが、現在の電子テキストの基礎になっているというのは西洋ならではの連続性の中にあるのだらうと思うんです。それに対して、東アジアは突然出現した渡来品に対応ができない、どういうふうにと向き合ったらいいのかわからない。ヨーロッパの学生たちが実際に手に



下野正俊[Shimono Masatoshi]……………

触れるかたちで中世の資料を扱っているのとやはり我々は違うわけです。その断続性と連続性という話は興味深いなと思いつながら聞かせていただきました。それと、テキストというか本を扱うときに、日本ではいろんな手法を受け入れて、それを受け入れるたびに一からやり直すんですよ。

入江 やり直すんです。ゼロから始めるんです。どのフォーマットでやるのかとか、どういうふうにするのかということから全部作り始めて規格化していくんです。そして規格の本質を理解せずに始めて、失敗してまたやり直すということが、日本ではありがちですね。

木島 どこかの大学がやったのを知らずにまた新しく別の機関がやるみたいなことばかりですよ。

下野 そうなんです。規格を議論しないとか規格について真剣に考えないとか。それは残念だなと思います。

永崎 逆に不思議なのは、アーカイブズ

業界の ICA⁸⁾ や博物館業界の ICOM⁹⁾ などが、それぞれデジタル技術の扱い方について議論してそれぞれ規格を策定して、少なくとも海外ではメジャーな機関はそれに準拠する。なぜ日本人はそういうことがなかなかできないんだろう、というよりも、むしろヨーロッパやアメリカの人たちは、なぜそれができるのかというのがむしろ不思議です。それはそういうことを専門にやるポストがあるからできるのか。専門的とまではいかずとも、それぐらい余裕がある人員の配置をしているがために可能なのか。それとも趣味でそういう議論するのが好きな人が多いのか。

入江 余裕があるのと、趣味なのと、人材政策ですかね。ヨーロッパだと、一人の人がそのポストにずっといますよね。皆、友達なんですよ。何をやっても友達だからすぐに紹介してもらえりし、話が通じやすい。

下野 抽象的な話になってしまいますが、それはギリシャでいう「ノモスとピュシス」だと思っております。つまり、日本人には、ノモスとしての制度・人々と、自然として単にそこにあるピュシスとの区別が無い。制度はあるものであって、あるものに従うという感覚が基礎にあるんだろうなと思うんですよ。ところが西洋では、制度、規則、規格というのは人間が作るものだから、先に作った者が勝者になるわけですね。1980年の終わりぐらいにユニコードが議論された時も同じだったような気がしますよね。出来た制度の中で頑張ってしまう。東アジア的なのか日本のなのかは、よく分からないけれども。

ヒューマニティーズ

下野 先ほどの断続性みたいな話につなげたいんですけど。デジタル・ヒューマニティーズということを言われた時に、ヒューマニティーズというのがそもそも一つの方法論なのか引っかけるところがあるんです。例えば日本文学や日本史学の専門家と話をしている、ご自分たちの方法論的な淵源は国学だというふう我真顔で言われたことがあります。日本のある分野の研究者の中には国学の方法論が残っているのだとすると、それはこのデジタル・ヒューマニティーズとして唱えられているヒューマニティーズの中に入り得るのかどうかという疑問です。自分の専門のドイツ哲学という分野を振り返ってみると、これも方法論的にドイツ版の、ドイツ人にとっての「国学」のようなものですから、いわゆる文学や言語学研究とはスタイルが違うという気がするんです。そういうものを全部デジタル・ヒューマニティーズのヒューマニティーズという上位概念に包みうるものなのでしょうか。日本だけでなく、それは東アジアの学問全体についても同じことだと思うのです。

入江 人文情報学が扱っているのだからヒューマニティーズなんだという議論の仕方があり得ると思います。

永崎 人文学の範疇というのは状況や主体によって変わるわけですよね。デジタル・ヒューマニティーズの場合、人文学的か情報学的かは問わず、人間文化研究みたいなことは全部対象であって、そういった研究の中でデジタル技術を使うのであれば、デジタル・ヒューマニ

ティーズとして必ず議論できるところがある。そこでそれぞれの方法論に基づいたデジタル技術の活用の仕方というのを持ち寄って議論することで、より良い成果を出していくだけでなく、自分たちの方法論自体もお互いに議論し合って方法論的反省に結び付けていけると良いのではないかと思っています。そういう意味ではデジタル・ヒューマニティーズといった時のヒューマニティーズというのはすごく広い。研究者コミュニティとしてどう関わるべきかということまで議論と実践が混じり合ったかたちで、学会連合の傘の下で研究が行われています。

仏教学とデジタル

木島 総論的なことをここでちょっと一休みにして、次に最先端であろう仏教学研究とデジタルのかかわりについて伺おうと思います。そもそも何で仏教学が突出してデジタルとのかかわりが強くて、何ができているのか、何を目標しているのかというあたりを、永崎先生からお話しいただければと思います。

永崎 仏教学以外でも、例えば国語学は結構積極的なんですよ。でも仏教学がこの分野で進んでいることは確かですね。なぜそうなのかと言うと、まず文字の扱いの難しさがあったのではないかと思います。サンスクリット語とかチベット語とか、漢字も外字がいっぱいあるような、そういう資料を扱わなくてはならなくて、コンピュータにかなり習熟していないと上手くできないわけです。パソコンを使って何とかしたいと思ったときにはどうしても詳しくならざるを得ない。一方で、学会として有力な先生がデ

デジタルに関心を示して引っ張って下さった時期があるのですよね。1980年代の終わり頃ですが、当時の日本印度学仏教学会の理事長だった東京大学の平川彰先生は、テキストを入力したり、あるいは論文目録を入力したりしている学会員の活動に関心を示して下さって、学会の仕事としてやろうということになりました。実質的な意味で分野をリードする先生がデジタルに対してそういう態度をとられたことが大きかったのではないかと思います。その後も大蔵経データベースというプロジェクトが94年に始まりますけれど、始められたのはこちらも東大の先生で、全国の研究者を集めてテキストを入力することになりました。そういう主導的な立場に立てられる先生方がこの方面に前向きになっておられたのが結果的にはすごく大きいかなと思っています。

東大の大蔵経データベース¹⁰⁾を始められた先生は、東大の前に長岡科学技術大学の先生をやっておられて、そういう工学的なことが身近にあって、この方面に関心を持つというパーソナリティをお持ちだったということも大きいと思います。日本の人文学の多くの分野では、コンピュータなんかいじって遊んでないで本業をやりなさい、というところが多かった。仏教学の場合はそういう意味では学会をあげてこれは役に立つものだからと取り組んでいるような状況でした。

木島 今お話しいただいたのは日本の場合でしたが、仏教学では、台湾でシーベータ (CBETA)¹¹⁾というデータベースがかなり早くからできたりしているので、日本の特殊事情ではなくて世界的に

仏教学の人たちはコンピュータに関心を持って早くから取り組んでいるような気がするんですけども、これは仏教学という学の性質ということではないんですか。

永崎 国際的な環境というのも凄く大きいです。というのは、実はシーベータは、SAT¹²⁾という我々が始めたプロジェクトに刺激を受けて始まったようです。国際的な環境の話にいきますと、UCパークレー (カリフォルニア大学パークレー校。University of California, Berkeley) のルイ・ランカスター先生 (Lew Lancaster) は、EBTI (エレクトロニック・ブティソティクス・イニシアチブ)¹³⁾プロジェクトというコミュニティを始めた方なのですが、この人は仏教学にコンピュータを導入することにもものすごく強い関心をお持ちでした。実際に自分でやるわけではなくて、色々な地域の関心を持っている機関、研究者に声を掛けて、色々なデータベースを作ってきたという先生です。仏典のデータベースを皆で作らしようということです。日本からの参加もありました。そこから発生したプロジェクトが今でも世界中で行われています。

もう一つ大きな背景として、仏教研究では英語で議論する場が国際的に大きな位置を占めています。それで国際的なコミュニティが成立しています。インド仏教、チベット仏教の研究とか、日本仏教研究を東アジアの枠組みで研究したりするということになると、どうしても国際的なコミュニティに参加しないと上手く研究が進まない状況があります。そして、その場で活躍する欧米の研究者

は、デジタル・ヒューマニティーズというのがあって、他の分野ではデジタルを使ってこんなことが行われているというのを脇に見ながら、なぜ仏教学ではそれが進まないのかとモヤモヤしているわけです。国際的なコミュニティに参加すると、その思いが高まって、仏教学でもできるのではないのかという感じになるわけです。こんな試みがなされている。中世研究ではあんなことをやっている。仏教もああいうふうなことができるんじゃないか、何でできないんだ、もっとやれるんじゃないか、やらないといけないんじゃないか、ということになってきます。つまり欧米からアジアのほうにかなり直接的に刺激をもらうことになっているわけです。逆に言えば、日本でヨーロッパ研究やアメリカ研究をしている人たちの多くは、本当はデジタル・ヒューマニティーズの威力を知っているはずですが、日本語ではそれについて発言しない人が多いのではないのでしょうか。そういうことも少し分かってきて、もっと日本語でも発言して下さい、教えて下さいよ、と最近は少し思っています。

下野 研究する土台が日本にありながら、国際交流が一番盛んなのが仏教学ということですか。

永崎 一番かどうかは分かりませんが、仏教学はそういう圧力にさらされているというのは事実ですね。日本は世界的にみて大きなデータベースを持っているので、そういうところには必ず世界から圧力がいく。日本文学などですと、外からの圧力は弱いわけです。海外のデジタル・ヒューマニティーズがどんなことをやっているかを知っている人は少なく

て、閉じた感じになるのかなと思うんですけど。

木島 中国学も、立場からすると、海外の研究者から刺激を受けているはずですが、コンピュータなんかやっていないで本を読めという雰囲気が強かったですね。やるなら趣味でやれという雰囲気が非常に濃厚で、仏教学みたいにひらかれていないですね。それに、日本の中国学の人たちは入力ということはまずやらない。読む。読んで理解するということが一番大事なこととされているわけです。そもそも仏教学という学の性格とデジタルとの相性みたいなことはないんですか。

永崎 テキスト分析って、書いてあることを対象にする話なので、仏教それ自体との相性は必ずしも良くなって、仏教哲学の精髓みたいなところには、デジタルというのは全然入っていないんです。それを研究するための素材としての資料の共有や効率的な利用などにデジタルはすぐく入っていますが、結局、読めないと話にならないということは依然としてあります。

木島 仏教の中でも特殊な一分野かもしれませんが、禅というのは一番の核心の悟りのところはダイレクトには何も言えないから「語録」という文字データが莫大ですよ。不立文字と言いながら一番文字量が多いのは禅なわけです。つまり、言葉で表せないけれど、皆が頭のなかであるはずと思っているものがあって、その一方で、言葉の世界への親しみというか、依存というか、そういうものが禅に関してはすぐくあるなという気がするんですけど。インド仏教は言葉を

使って説明するという傾向がかなり強い
ですよ。

永崎 仏教論理学の世界では、きちんと
言葉で説明しようとするので、そうい
う意味ではデジタルとは比較的相性が
いいですね。

西洋文献学・東洋文献学とデジタル

木島 西洋哲学ではどうですか。

下野 今伺いながら二つのことを考えて
いました。

第一に、西洋哲学と言われましたが、
その西洋哲学の中でも北米を中心とした
アングロサクソンの哲学研究というの
は、完全に自然科学のスタイルで、電子
ジャーナルによって支えられている研究
者コミュニティの共同研究というスタイル
になっています。一方、ヨーロッパで
の研究はというと、著名哲学者の全集は
データベース化されているけれども、そ
れ以外のところが最近までほぼ皆無に
等しかったんです。ジャーナルの電子化も
アングロサクソン系に比べれば遅れてい
るというのが現状です。

第二に、その一方で、ヨーロッパで
も研究環境が大きく変わっている部分
もあります。例えば著名哲学者以外の
マイナー哲学者というのが無数にいる
わけで、その人たちの書いたものが図書館
の中で埋もれていた。実際の図書館の書
庫に入らなければ見ることができなかつ
た。ところがそれらが Google ブックス
などで読めるようになってきて、これは
研究スタイルの爆発的な変更をこの10
年でもたらしたと思います。日本でい
う「国学的」にマイナー哲学者の原典資
料を読んでやる研究はドイツ人がするも

の、それ以外の人間は一般に活字で手
に入る書籍を使ってやるものというふう
に、どことなくすみ分けがあったのが、
今はなくなってきていて、ドイツ人た
ちはとても危機感を持っているはずで
す。カント研究で具体的に言うと、カ
ントの蔵書目録が web 上で公開されて
いて¹⁴⁾、そこに載っている本がほぼ
Google ブックスで読めてしまうので
す。そうすると、カント自身は読んで
いたけれど、その後読まれなくなっ
たマイナー哲学者たちのものが読める
ので、研究がものすごく精緻化した
ということがあります。これがスタイル
として確立するとどう変わっていくの
かというのがとても興味のあるところ
です。

木島 それはまだ進行中ですか。

下野 進行中です。

入江 Google ブックスは、アメリカの
ものの処理が落ち着いたので、ヨーロ
ッパへ対象が移行していて、それも終
わりに近づいているようです。

木島 それに、Google ブックスにし
てもインターネットアーカイブズにし
ても単なる JPEG とか PDF などの画
像だけではなくて、テキストファイル
もついているものが多いですからね。

入江 フランス系の先生で、前はフラン
スに行っていたけれど、今はフランス
に行かなくても日本からでも読める
から大丈夫という人もいますね。

永崎 フランスはそうですね。

下野 そうすると、例えば人文学では、
カント研究で言えば、今までだったら
一つにはマールブルク大学¹⁵⁾が格付
けをする機関として機能してきたん
だろうと思いますが、その優位性が崩
壊してしまう

わけです。拠点が多極化するとか、中心があって周辺があるとかたちが崩壊しつつあるんだらうなと思います。それがひょっとすると仏教学の世界にはすごく早い時期にきたということなんでしょうかね。

永崎 東京大学とか、ウィーン大学とか、世界に仏教学の中心的な場がいくつかあって、そういうところがデジタル化にも取り組んでいるという感じはありますね。一方、台湾の法鼓山は比較的新しく始めて、デジタルも含めて中心の一つとなりつつあるといえるかもしれません。

木島 ところで西洋の「近世哲学」は中小哲学者の文献が読めるようになってデジタルに歩み寄ろうとしているのかもしれませんが、逆に近代以降の西洋哲学で、活字になる以前のマニュスクリプトなどの研究がデジタル化によって盛んになるとか、そういうことはないんですか。

下野 デジタル化によって盛んになっているという話は聞いたことがないです。マニュスクリプト研究が意味を持つ領域というのは、近代以降で言うと、フッサールとウィトゲンシュタインぐらいかな。

永崎 ジェレミ・ベンサムはわりと流行っているようです。彼の自筆原稿から著作集を起し直すというプロジェクトが、1950年代ぐらいから行われていました。それ以前に出版されていた著作は、編集が入りすぎていてベンサムの思想が誤解されてしまうような状況でした。一方、膨大なマニュスクリプトがブリティッシュ・ライブラリー (BL. 大英図書館) とユニバーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) に残っていて、

それを整理する作業をやっていたようなのですが、お金がなくなって、2010年ころにはプロジェクトがもう終わりそうな状況でした。そこで UCL のデジタル・ヒューマニティーズセンター¹⁶⁾が手を差し伸べて、これをクラウドソーシング¹⁷⁾でやろうということが始まり、プロジェクト自体も息を吹き返しました¹⁸⁾。デジタル・ヒューマニティーズ業界ではすごく有名なプロジェクトなのです。英語ですし、ベンサム研究者は世界中にたくさんいるので、世界中から参加者があって、翻刻作業は進んでいます。そんな感じのことがマニュスクリプト・スタディーズとか自筆原稿による動きとしてあったみたいです。

木島 その西洋哲学に関しては中小哲学者の書いたものを読めるようになったということと、マニュスクリプトの掘り起こしができるようになったということはあるにしても、西洋哲学の方法論は資料が増えたということだけで本の読み方が大きく変わったということはデジタルに関わっては起きてないんですか。

下野 いや、変わったと思いますよ。テキストの本文を徹底的に解体できるようになってしまったわけだから。元ネタに遡れるというのはものすごいことだと思いますよ。

木島 東洋の文献学についてちょっと話をさせてもらおうと思います。今伺った西洋の状況と決定的に違うのは、漢字の種類がやたら多いうえに、異体字の問題があって、すごく複雑なことです。単純に文字起こしとか、翻刻ができない。古い字体を使っているということは歴史性を誇示するということだったりして、ユ

ニコードなんかテキスト化してしまうと失われる情報が非常に多いのです。まわりついていた権威性だったり属性がなくなってしまうんですね。お習字として上手な字で書かれた文献は権威があるというようなことが、ユニコードになると全て飛んでしまうわけです。東洋学というか中国文献学の人間が恐れていることのまず一つ目はこれですね。

永崎 ヨーロッパ中世研究でも26文字のアルファベットに入っていない文字がいっぱいあるんですね。それで、中世研究だと画像が結構大事という感じになっています。この問題は東アジアの特徴というよりもちょっと広く捉えられるかもしれないですね。

入江 前近代の特徴。

永崎 そうですね。

下野 今の研究手法全体を電子テキストに移すということはたぶん無理です。紙でやっている手法をそのまま取り入れて電子でやれるかというのでなくて、そうすると新しい研究は、電子テキストに変換してしまったほうが良いとしたら新しい動きが出てきやすいですね。

入江 僕は研究者ではないので分かりませんが、そうしないと無理なのかなという気はします。

下野 18世紀から19世紀ぐらいつけて全世界的にテキストを読む技術というもの切り替わったような気がするんです。清朝で考証学が出て、日本でちょうど国学が出て、ヨーロッパでは古典文献学が成立する時代がここですね。現在の人文学というのは、多かれ少なかれそれらの方法論を受け継いでいるんだけど、それって結局何なのかと言う

と、やはりグーテンベルク以来の情報量の飛躍的な増大ということに対応した結果なんだろうと思います。西洋ではグーテンベルク革命が生じ、東アジアであれば木版印刷とかが出回るようになってきた。その結果としての読み方の変化です。それと同じことが起きているんだとすれば別のテキストの読み方が出てくるはずだと思うわけです。紙ではなくて、電子テキストの時代ならではの研究に進みうる可能性があるだろうという気はしますね。

永崎 そうなると思います。そうなると思うんですけど、既存の研究者はあまりのらない。

木島 中国文献学でいうと、この号にも齊藤さんの計量テキスト分析を使った論文を載せましたけど、ほんとうに少ないですね。

入江 既存の人はまだ定年まで勤めてくれるからいいとして、若い人が、完全に新しい研究手法に乗ってしまうわけにはいかない、こういう状況はしばらく続くのでしょうか。

永崎 新しいことを考えてやっている人たちの邪魔をしないことは大事ななと思っています。

永崎 先ほどまでの話ですと、これまでの既存の研究をしている人がどうデジタルを使えるかという話が、中国学では重要というか優勢なのかなと思っていて、CADAL¹⁹⁾とか CTEXT.org²⁰⁾とか、新しい道を探っている感じがあるんですけど。中国学の方から見て、プラスの捉え方がされていますか。

木島 あまりプラスに捉える方向はないですね。誰でもテキストを入手できるか

ら便利、学生がお金がなくても勉強できるというプラスはあると思いますけど、新しい研究手法に大きな期待をかけているという雰囲気はないですね。むしろ紙の時代に積み上げてきた研究蓄積が、デジタルに移行すると失われてしまうのではないかというような危惧はよく話題になりますね。仕組みの構築に積極的にかかわらずに、使う段になって文句を言うというのは申し訳ないですけど。本文と注釈の関連付けとかテキストクリティークとかの部分では、紙の本ほど上手くいっていないのではないかという気はしますね。

永崎 原文テキストというのは永遠に未完成なものだと思うので、基本的に研究手法の開発道具として使うという側面もあるかなと思います。そういう文脈において、版面画像ではなくて、テキストデータとして提供されると、分析機能が結構充実して使えるのかなと。

木島 紙の本を読むことでトレーニングを受けた世代はもちろん、電子テキストを使うことから研究とか本読みを始めた世代でも、新しい動きを上手くつかまえて、それに自分も乗って何かをやるという感じにはなっていませんね。そもそも私の世代ぐらいで中国古典学の研究者のポストが消滅してしまう。そうすると引き継ぐ世代さえいないという感じですよ。中国学、東洋文献学の人間はデジタル化の新しい可能性というか環境の変化が起きているのにまだ頭が慣れていない。そうなる前に紙媒体を扱うのに慣れた学者の世代で、学の伝統が途絶えてしまうのではないかという危機感です。

中国の中国学

入江 中国の研究環境は、日本と大きく違うらしいですね。中国研究は、データベースを使わないとできないから、中国へ行くしかない。貴重書を見るためではなくて、電子情報にアクセスできる環境を獲得するために中国に行かなくてはならない。でも本の写真は日本にもあるぞと言って、周囲は誰も理解してくれないということをよく耳にします。

木島 かつてはマニスクリプトを見に中国に行ったりパリに行ったりしたんだけど、今は電子データ取得環境を入手するために中国の大学に留学してパスワードをもらうということですよ。

入江 やっていることは同じなのでは。

下野 いやいや。

永崎 アメリカには全部見られる大学が結構あるんですよ。そうすると、太平洋を渡ってでもアメリカに行って勉強すればという感じにも一方でなっているんでしょね、中国人の方は。

木島 そうだと思います。貴重書も含めて、北京大学図書館、国家図書館、社会科学院はおろか、人民解放軍図書館などまで含めて、公的機関が持っている書籍がどんどんデジタル化されているんですよ。それを国が全部コントロールして、学生にはパスワードが支給されるんですよ。

入江 そうすると、最初の話に戻ってしまうような気がします。人文情報学とは何かという話を永崎先生がされたときに、最初に言われたのが研究手法の変化として共有ということをおっしゃっていましたが、デジタル化したことによって

教育がむしろできなくなっているということになりませんか。つまり、紙の本だったら買ってることが可能ですが、それができないというのは相当倒錯した事態のような気がします。

木島 金があればデータは買えるんですよ。中国政府は極めて資本主義的なので、特権的に隠すんじゃなくて、金を出せば見せてくれる。入手もできる。

入江 そうか。それは紙の本と一緒にです

ね。

木島 となると図書館がデータを買うということに金を出してくれるかどうか、本を買うのと同じでしょうという論理を分かってくれるのかどうか。資産としてデータを認めてくれるかどうかですよ。

入江 データは資産として計上するのが難しいんですよ。

II ……図書館の役割と未来

木島 電子化と深くかかわりながら、大学での研究に大きな役割を持つ図書館がデジタルの波にどう対応していこうとしているのかを、話し合いたいと思います。まず大学図書館の最先端を慶應義塾大学メディアセンターの入江さんに語っていただきます。

入江 紙の図書館というのは、予算に合わせた本を買って、本が目の前を流れていくという仕組みで動いていきます。一方電子ブックは、買ったとなると一気に読めるものが数万タイトル増えるとか、モノがないだけに、紙とは違う動きをします。電子ジャーナルは1990年代の後半は和洋合わせて1万5千タイトルくらいしかなかったのですが、現在では洋タイトルだけで7万ぐらあります。それらは目の前に存在しているわけではなく、システム上というか、ネットワーク上を動くだけです。ものではなくて、アクセスするための契約だけが決め手なわけです。電子になると、紙の時のモデルとは、量も質も全く変わってしまいま

す。そしてさらに問題なのは、ハイブリッドと言っていますが、全部デジタルになってしまうわけではなくて、紙も電子もやらないといけないというのが今の図書館なわけです。

電子が導入されたから紙の本の貸し出しが減っているかという、実はそんなことはない。両方維持していかななくてはならないから、ハイブリッド図書館というのは格好良いですが、とてもコストがかかるんです。紙しか知らない人はこういった裏の事情はご存じないと思いますが、全く違う図書館だと思ったほうが良いと思います。ところが紙の図書館を運営してきた人たちが管理職の主要を占めているので、電子図書館へ比重が移っていく場合、現場と管理職のギャップが生まれ、とても意思決定が難しい図書館になっている。特に国立大学は理工系に中心があるので、そちらにシフトします。私立は文系が主要なので、文系の感覚が大事になってきます。ところが、私立大学も国立大学に引っ張られて、方針が立

てられなくなっているというのが現状だと思います。その上に、電子ジャーナルの価格高騰があって、どこまで買えるかという問題も抱えてしまっているのが現状です。

下野 慶應でさえそうなんですね。

入江 どこまで電子ジャーナルのパッケージを維持できるかという状況です。いくらか安心なのは、少数の国立大学だけですかね。あとはほぼ維持していけないと思います。図書館にお金がなくなると、研究しようと思う人は、電子で読める環境にいないと何もできない。電子の研究環境をもとめて職場を探すということにもなる。

下野 フランスに行かないでもできる、というさっきの話の逆ですよ。

入江 文系の先生たちが必要としている情報はオープンにできるものが多いので、図書館では、そういう資料をどうやって利用可能な状態にしていくかということもやらなければなりません。先ほど話していたように、原資料を補足していくための努力を図書館がしないといけないと思います。研究者は、書く人と読む人が一緒なので、研究者自身がどう自分でやっていくかを考えればいいとも思っています。そうすると全く新しいモデルを研究者が作っていく可能性はあります。その一つのかたちがオープン・アクセスなのかもしれません。色々なかたちがあるでしょう。また、研究者の ID がどんどん増えていくと、出版社が研究者を個人認証してアクセスさせるということも十分考えられます。いま大学はお金を払えるからいいですが、図書館にお金がなくなってしまうたら、出版社は個

人を相手にしていくしかない。ネットショッピングみたいに論文を買うというモデルはすでにありますが、論文を書けば、著者へ出版社が公開してくれるというモデルはそんなに突飛ではないのかなと思います。個人認証をベースとして、論文の著者へ必要な資料を比較的安価に提供するというモデルです。

下野 「たくさん書いてプライム会員」みたいな仕組みですね。ある意味では近代科学勃興期のジャーナルとか学会が成立したときの姿ですね。

入江 今は色々な ID があって研究者個人で入手するモデルが増えている。図書館抜きでやることもありかもしれない。図書館が便利提供を維持できるのであれば、それもありかもしれない。

下野 その場合、研究者が個人として個人資金、研究資金でアクセス権を買う。

入江 そうですね。図書費を全部解体して研究者に返します。

下野 そういうことか。

入江 今のモデルは古くなってきてどうしようもないですが、すぐに解体はできません。いずれにせよ研究者がやりやすい方向にいくしかない。僕は図書館の立場の人間で、それを邪魔してもしようがないので、研究者がどこにいきたいのかを決めてほしいと思っています。そのための手伝いをするつもりです。だから図書館がいらないのであればそれでもかまわないです。図書費を全部解体して研究者に返す。

永崎 例えば日本だと J-STAGE²¹⁾ とかあるわけですよ。あそこにつければ、図書館を経由しないで無料で学術情報を見られます。



入江 伸[Erie Shin]

入江 そうなると、もう図書館は関係ないですよ。研究者とプロバイダーとの関係で使いやすい仕組みを作るというのにはありますよ。色々と動いているので、これが正解というものは現時点では多分なくて、色々な動きをした結果、今後どうなるのかなという話だと僕は今思っています。僕としては研究者中心の学術情報流通がどうなっていくかを見ながら、図書館は自分の役割を決めていくしかないだろうなと思っています。

もう一つは図書館システムの話について、電子の図書館システムというのは、プロバイダーが作っている大きなデータベースがあってそれを使うんですよね。グーグルみたいな大きな学術情報流通のサブシステムになっていかないといけないんです。図書館がどうのこうのではなくて、その全体の中のメンバーになって、利用するかどうかということです。図書館が受け入れた本の目録を作って、ということではなく、これは買っ

ず、もしくは見えるようにしていますということですね。僕らはそういうものを使って、アクセスしやすいシステムを作ることを目指しています。そうすると一大学に一図書館が必要ではないだろうということになって、図書館機能を整理して、コンソーシアムというものが視野に入ってくる。例えば早稲田大学では書庫が余っているので、使わせてもらって、一方でプリントシェアみたいなものも含めてやっていくという仕組みですね。

永崎 慶應と早稲田は共同書庫を始めたのですよね？

入江 そこまで明確には進んでいません。ただそういう目標はあります。紙の場合には、早稲田の本は自由に借りられる、慶應の本は自由に貸すようにというところにいくでしょうね。電子は契約だからまだまだですが。そういう流れで次にどこにいけるのかという基盤は作るつもりです。

永崎 コロンビア大学とかプリンストン大学とかで共同書庫をやっている。ああいう感じになるのかなあと思っていたんですけど。

入江 あそこまでいくのはもう少し先だと思います。ただ慶應と早稲田は、そういう環境はできているし、昔から相互に入館自由なので、実現しやすいです。だから色々動いているわけです。特に私立はこれから厳しいので、効率化しながら進めるということになっていくでしょう。僕らは展望を言う立場にないですが、行ける可能性を潰さないでおきたいということですね、今は。だから図書館はいらないと言われても何とか生きていけるように。いらないと言われたらそう

ですかと身を引く覚悟です。

木島 慶應の場合だとそういう新しい電子的なものと同時に、斯道文庫²²⁾みたいな博物館的なところは当然残っていくことになりますよね。

入江 そうですね。図書館が博物館と電子資料に分かれる。結局ハイブリッド図書館というのは、コストが高くて読むものとしての紙は電子にかわっていく。紙は全部博物館にいく。利用は電子で済ませて、紙を見たい時は博物館に行ってくださいということになる。博物館は本キャンパスにはいらないのでストレージになっていく。今アメリカは結構そうですよね。斯道文庫も変わっていくと思います。

永崎 現物資料でなければいけない物だけは博物館に残るような感じですかね。

地方中小大学

木島 それを聞いた上で地方中小大学の図書館長としてはどうですか。下野先生。

下野 地方中小大学の特徴としては、教育図書館と研究図書館を兼業せざるを得ないというところがあります。今、愛知大学豊橋図書館の館長になって3年目なんですけど、図書館の事務課長に、このような時代になったんだから教育図書館でやっていだけで精一杯だと思うと私が言ったんです。教員の研究については個人研究費、その他でまかなってもらおうというのが本筋であって、大学の組織としては教育図書館の方向でいくべきではないのかと言ったら、課長に、ここは研究図書館と教育図書館と兼務する場所であるべきだと私はそう信じてやっている

のですと言われました。志はまことに立派なのですが、限られたリソースの配分のためには、まず教育図書館なのか研究図書館なのか選ばされるという第一段階が避けられない。そして次に第二段階として、学生、教員のどちらに向けたサービスかということでも全面的に電子化できるのかできないのかという選別がかかってくるような気がするんです。愛知大学のような中小のところは、本来的に教育図書館の機能を担わされていて、そうすると紙から解放されるということとはなかなか困難です。

かつ箱モノとしての図書館が、大学の中の一教学施設として扱われるようになっていっているというのが21世紀に入ってから大きな流れです。それはかなり危険な方向だろうと思うんです。箱モノとしての図書館が大学の中であって、それが教学上の施設であって、そこに本もあると言われてしまったら身動きとれないですよ。教育図書館であることを捨てられない大多数の私立大学の図書館は、そこで場所、人の負担というのを負わされてしまうわけです。そうすると、教育や研究にとって使いやすい、ふさわしい仕組みを作り上げることよりも、箱モノをどう動かしていくかということが関心の中心になってしまいかねないですね。

入江 ラーニング・コモンズができて、図書館の本来の機能が置き換わってしまうかもしれない。そうなると図書館の本来の機能が忘れ去られてしまう。ただ、図書館の本来の機能では成果として目立たないから自分たちが生き残るための仕組みを新しく作らなくてはいけないとい

うような思考が、大学（特に国立大学）図書業界にあると思います。パソコンを使うだけだったら図書館でなくてもいいのではないかということになるし、学習空間を作るなら、図書館内である必要がなく、大学内で最適なところに作った方がいい。図書館の問題ではなく、大学の問題としてとらえる傾向が慶應では強いですね。

下野 何故か、ここへきて図書館がいろいろなことを背負わされるようになってきている気がするんですね。

入江 慶應大学では、大学として必要なことを、図書館にこだわらず、学内の適切な部署でやりましょうということです。私立は図書館が不要になったら他の部署へ行けばいいと思っているから。慶應も、研究と教育両方と言っていますが、研究は先生や大学院生がやっているものなので、図書館の仕事は、電子ジャーナルを買うぐらい。電子ジャーナルが買えなくなって一番困るのは大学院生ですね。大学院生の数は論文の数に比例するので、研究力（論文数）では大学院生の多い国立大学に勝てるわけじゃないんですね。

下野 そうですね。大学という制度そのものが、維持するのが困難な時代になってきていて、「大学」と呼ばれるものは残るんだろうけれども、10年後には全然違うものになってしまうんだろうなと思います。それは決して良い方向への変化とは思えない。その変化に対して図書館はどういう立場でいればいいのか。自然科学系の人には抵抗しないと思うんです。結局、抵抗しうる勢力として残るのは人文系と社会科学の一部だ

けだろうなと思います。

木島 中小大学の教育図書館か研究図書館かというので、もちろん研究図書館オンリーには絶対なれない。教育図書館ということていくと町の私立図書館とか県立図書館とコラボをするというか、そちらの方向も当然出てきますよね。それはどうですか。あり得ないでしょうか。

入江 今はそれこそ社会貢献で、市民が登録すれば使えるという取り組みをしている図書館も多いと思いますが、私は本来の姿ではないと思います。特に私立大学がすることではないと思います。学納金で運営しているわけだから、国公立とは話の次元が違います。

下野 大学の人たちは、国立モデルをすべて目標にしてしまうからですね。私立は違っていい。そのために私立があるんだから。

木島 もう一つ違う方面から。さきほど慶應と早稲田の合同書庫構想の話もありましたけど、全国の大学が購入書籍をすみ分けして買うみたいなことも考えられなくはないのかなと思うんですけど。慶應ではそういう試みは。

入江 ワシントン大学がもっと大規模でやっていますよね。そこで何年か運用すると、この本はこちらで買おうというふうに自然に分かれるそうです。無理にやると結構面倒くさいですが、自然となるらしいです。その間で本が自由にやり取りできるんだったらいいじゃないということですよ。

木島 慶應の中だと所詮は慶應のお金で買った本だという保証があるわけですけど、例えば早稲田とすみ分けをしようという動きはないんですか。

入江 今はないです。でも多分それはそのうち出てくる。というか、買えるのなら出てこない話ですが、買えなくなっているし、どこを強くするかという戦略で出てくるんでしょうね。これは頭からやると無理がくるので、自然に出てくるのだと思います。

木島 その条件としては慶應と早稲田みたいにお互いに自由に向こうの図書館に行けるというのが前提ですよ。

下野 私が館長をやっている愛知大学豊橋図書館は、東海地方という土地柄的に大学コンソーシアム自体ができないところにある。それはジリ貧ですよ。

木島 名古屋の市内だと、まだ例えば仏教学だったら東海学園大学に行くとか、愛知学院大学に行くとか、キリスト教だったら南山大学に行くとかということではできるけれど、豊橋にいる限りは難しいですよ。

下野 さきほどの発言なんだけれども、愛知大学の図書館は教育図書館でしょうとわりと強く言ってしまった理由というのは、研究図書館であるためには教員側の積極的なコミットメントが必要なはずなんだけれども、それが無いわけですよ。研究者としての教員と、図書館との間の関係性の構築というのをやり直さないと、これだけ金がなくなっている中で、有効な動きにはつながらないですね。

ところが、現実とは全く逆です。私の所属する文学部で言えば、図書館なんか要らないと明言した部門がありました。数種類の電子ジャーナルが読めればそれで研究はできるので、要らないということ。また、洋書、洋雑誌の高騰で洋雑誌を随分減らしたときに、文学部としては

まずいので、教授会に声をあげてほしいと言ったことがあるんです。ところがジャパノロジー関係の人たちは、(洋雑誌だから)自分たちには関係ないというスタンスでした。内輪の恥を晒すようですが、愛知大学だけでなく、多くの大学がこういう雰囲気なんだろうなと推測するわけです。大学図書館が、色々なところであまり景気のいい話を聞かなくなったというのは、大学というコミュニティが崩壊していつていることの一つの表れのような気がします。図書館サービスは、各学部で教員数と学生数を按分して割り振るとするのがメインだから、その分母がおかしくなったら、もうダメです。

木島 愛知大学でも、電子ジャーナルの場合、大学図書館で買う分と学部で買う分の両方がありますね。

入江 電子ジャーナルの大規模パッケージのような巨額なものを、買うか中止するかという判断が図書館ではできないので、その判断はもっと上に任せるしかないと思います。

木島 もう一つ、慶應であれば斯道文庫、愛知大学であれば東亜同文書院大学記念センターのように、大学の中に研究所があるスタイルと、永崎先生のところのような独立研究所と、大分仕組みが違うと思います。研究機関の存続のあり方として大学が本当にどこまで抱え込むべきなのか。人文情報学研究所として運営ができていたんだったら、大学が抱えなくてもいいかもしれないし、その辺は実体験としてどのようにお感じですか。

永崎 大蔵経データベースは、東大の下田正弘先生が代表のプロジェクトで、うちの研究所は、その技術支援をするとい

う位置付けで取り組んでいます。技術情報を集めたり、情報発信をお手伝いしたり、実際に開発をしたりとか、そういうことを我々のところでやっているわけです。ですから基本的にうちはコンテンツは何も持っていません。図書館的なことは一切やっていない。ただ日本をはじめとして、北米の大学図書館の日本研究司書とか、東アジア研究司書のコミュニティにも情報提供をしていて、これは図書館単体ではなかなかできないところかもしれません。言ってしまうとそういう方面のデジタル技術に関する情報共有が我が国だけでは難しいので、そこを上手く共有できるような場を形成するところに貢献できているかなと思います。

木島 東大を支援する技術提供という立場でいくと、東大付属ではなくても当然いいわけですね。関西大学でシンポジウムがあればそちらに出かけるというふうに。

永崎 そうですね。組織的な関係ではありませんが、国立国会図書館や京都大学の人文科学研究所等にも協力しています。

木島 地方大学だとそういう仕組みのすみ分けは全くないんです。教育も研究も学生のお世話をするのも全部単独でやらなくてはいけない。その一方で研究所として独立で運用するという研究所のあり方というのは、東京だからという面はあるにせよ、すごく心強いとかそういう方向もあるんだなという気はしました。

永崎 東大のインド哲学仏教学研究室は世界的な拠点として、世界から研究者が集まるところなので、そこがきちんとで

きていないと仏教学自体が終わりというような感じもあります。そういった環境と、科研とか仏教関連団体の寄付などもいただいて、大蔵経データベースは運営できているわけです。

あらためて図書館の役割

入江 図書館はどうなればいいのでしょうか。期待することはなんでしょうか。

下野 何でしょうね。

入江 ないならないでいいのですが。

下野 素朴な話ですけど、何を期待するかというと古典的なランガナタンの五原則²³⁾みたいな話に行きつくのだろうなと思います。媒体がどう変わろうが、つまり電子メディアであろうが紙媒体であろうが、あるいはそれ以外の何かであろうが、やはり五原則です。図書館がこれまで担ってきた機能を、大学の新自由主義的改革に呑み込まれつつある中でどれだけ死守できるかということのような気がします。そして個人アクセスにばらけたとしてもそれが可能であるようなシステムなり体制なりを維持するというのは図書館の仕事なのだろうと思うんです。

そう考えてみれば、ランガナタン五原則というのは、当たり前のことを言っているだけのように見えるけれども、ちょっと社会的経済的な条件が変わると、あるいは政治的な条件が変わると簡単に維持が困難になるような内容ですよ。だからこそ図書館がそこにコミットしていかななくてはならない。あほくさいこと言っていますけどね。制度・かたちとしての図書館が、急速に変わりつつあって、5年先が見えないような状況の中で考えると、そういう理念的なところ

に戻るしかないのかと思ったりもする。理念的なことを考えないまま、それこそ国立大学に引きずられ、文部科学省に引きずられてやってしまうのが自滅する道のように思うんです。教育図書館にしても研究図書館にしても保存博物館ではないのであって、だから物理的にも機能的にも捨てなくてはならないものはたくさんあると思います。さきほどの例で言えば、地域住民サービスなどもそんなことだと思う。

入江 慶應は元々保存図書館の役割も考えていましたが、最近は結構捨てています。日吉の図書館は、ここ何年かは、買うより捨てるほうが多いかな。

永崎 複本はある状態なんですか。

入江 複本はほとんどないです。三田と日吉に一冊ずつはあるけれど、日吉の中では複本は買いません。

木島 捨てるというのはキーワードですよ。

入江 捨てるのに慣れるまで随分かかりました。10年ぐらいかかったと思います。

下野 慶應も同じだろうと思いますが、うちも教員に貸して返ってこない本を除籍廃棄処分になると、会計上の資産が減少するので踏み切れないという空気はまだ結構あるんです。

入江 それはありますよね。やはり生真面目な世界なんですよ。

永崎 逆に収入の方でいうと、デジタル資料を提供して、その報酬としてもらう金額が、年間500円しかないのに、それでもなおオープン・アクセスにしないとやっているところもありますね。

入江 財政的な基盤が大学にぶら下がっ

ているだけでは、図書館の運営は多分無理だろうと思うんです。だから何らかの、日銭を稼げるような仕組みを構築して、ある程度、財源を図書館自体で確保できる方法を考えていかないと、私立大学の図書館は今後厳しいだろうなと私は思います。

木島 最後はちょっと景気が悪い話になりましたけど、デジタル導入だけで、学術研究にせよ図書館問題にせよ、それらがすべて解決できるわけではないということは分かりました。気を抜かず丁寧に、デジタル方面にも目配りしながら、新しい解決策を探っていくしかないですね。長い時間、色々なお話をありがとうございました。

(2019年4月29日愛知大学東京事務所)

注

- 1) インターネット企業である Google が、紙製の書籍からスキャンした書籍データをインターネット上で公開・提供しているしくみ (<https://books.google.co.jp/intl/ja/googlebooks/about.html>)。単なる版面データにとどまらず、書籍内の全文を対象に検索を行うことができる。著作権保護期間が切れた書籍は、全文が公開され、一種の電子図書館となっている。原本の提供元にはオクスフォード大学ボドリアン図書館、ハーバード付属図書館、スタンフォード大学付属図書館などがあり、日本では慶應義塾図書館が提携している。
- 2) Google ブックスが内蔵する書籍を対象に、単語や成句の出現頻度を調査し表示するしくみ (<https://books.google.com/ngrams#>)。中国語も含めて対応言語は増加しているが、日本語は未対応である。
- 3) 『カルチャロミクスー文化をビッグ

- データで計測する』(エレット・エイデン、ジャン＝パティースト・ミシェル他著、草思社、2016年)などで紹介されている。Googleがスキャンした大量の書籍を対象として単語やフレーズの使用頻度を調査し提示するソフトウェアであるGoogle Ngram Viewer(グーグル・Nグラム・ビューワー)を用いて、文献をビッグデータとして考察する手法。
- 4) 『デジタル・ヒューマニティーズ入門』(21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/dhc/sg2dh.pdf)を参照。
 - 5) 1949年、イエズス会研究者のRoberto BusaがIBMと共同で構築した、トマス・アクィナスの著作の用語索引「Index Thomisticus」。
 - 6) ARCH. <http://arch.oucs.ox.ac.uk/detail/89694/index.html>
 - 7) <https://tei-c.org/>
 - 8) International Council of Archives(国際文書館評議会). <https://www.ica.org/en>
 - 9) International Coalition on Newspapers. <http://icon.crl.edu/>
 - 10) 「大正新脩大藏經刊行に関わるあれこれ」(digitalnagasakiのブログ2014-2-26) <http://digitalnagasaki.hatenablog.com/entry/20140226/1393417764>
 - 11) CBETA 中華電子仏典協会 <http://www.cbeta.org/>
 - 12) SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース <http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>
 - 13) The Electronic Buddhist Text Initiative. <http://www.buddhism-dict.net/ebti/index.html>
 - 14) <http://publish.uwo.ca/~cdyck5/UWOKRG/kantsbooks.html>
 - 15) この大学にはカント・アーカイブがある。
<https://www.uni-marburg.de/de/fb03/philosophie/forschung/kant/>
https://www.online.uni-marburg.de/kant_
<old/webseitn/archiv.htm>
 - 16) UCLDH: UCL Centre for Digital Humanities. <https://www.ucl.ac.uk/digital-humanities/>
 - 17) これまでプロが作っていたことを、不特定多数のクラウド(群衆)が集まって何かを作り上げていくこと。ここでは多くの人の協力でベンサムのマニユスクリプトを翻刻すること。
 - 18) Bentham Project-UCL-London's Global University. <https://www.ucl.ac.uk/bentham-project/>
 - 19) Chinese Academic Digital Associative Library(大学数字図書館国際合作計画). <http://www.cadal.zju.edu.cn/index>
 - 20) Chinese Text Project(中国哲学書電子化計画). <https://ctext.org/>
 - 21) J-STAGE(科学技術情報発信・流通総合システム)は、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が構築した日本の科学技術情報の電子ジャーナル出版を推進するプラットフォーム。電子ジャーナル出版プラットフォームを提供し、国内の学協会および研究機関を支援し、学術的な出版物を低コストかつスピーディーに公開している。 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>
 - 22) 慶應義塾大学附属の研究機関であり、同時に図書館機能も持つ。16万冊以上の蔵書を持ち、中には日本文学関係、漢籍などを中心とする貴重書も多い。また書誌学研究も行っている。
 - 23) ランガナタンが提唱した図書館学五原則。
 1. 本は利用するためのものである。
 2. 本はすべての人のためにある。または、すべての人に本が提供されなくてはならない。
 3. すべての本をその読者に。
 4. 読者の時間を節約せよ。
 5. 図書館は成長する有機体である。